



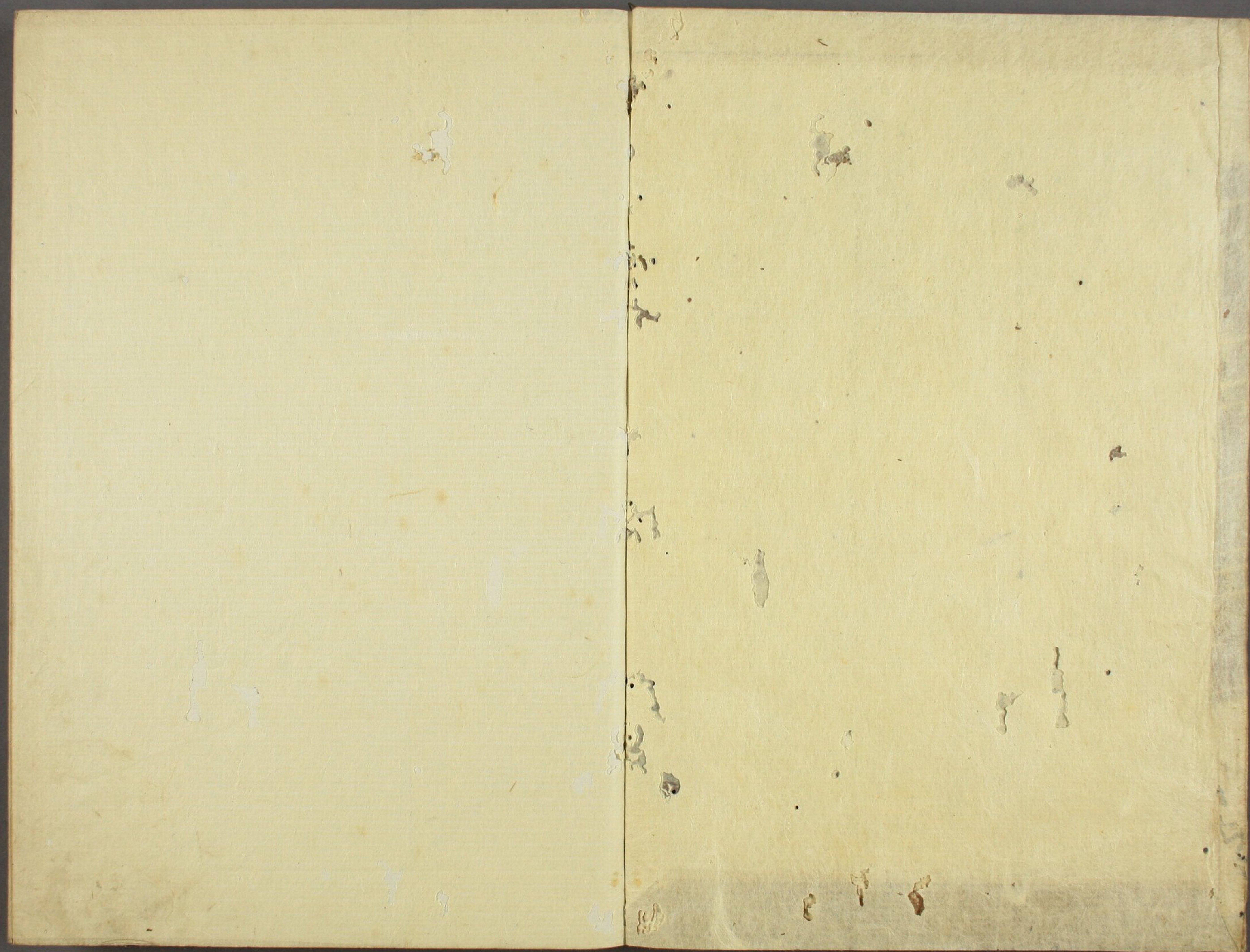
源注拾遺

一一

全四本











源註拾遺卷第一

桐壺

けきき

うけせみ

夕かほ

若糸





桐壺

一

いふやんしとふれきやまぢあゝぬ  
 研きしめてし三層の糸をいふ止事しと  
 ○今梅やんしとふれきやまぢあゝぬ  
 但し只やいふをぬぬあゝぬ

後拾遺 羈旅部のことと云ふわらうのむか  
 かつみはあゝぬりちりけりる乃よ女乃家よあゝぬ  
 いじつあてさうもくおぬえけいこ三日けりて  
 やらぬあゝぬ事よらうてぬりえをむかはな  
 つみあゝぬれしよあゝぬあゝぬけりるはやん  
 とぬあゝぬえやいしよき事あゝぬをいふ事



かしくは隣花の意もとかうふるを色とちくは女  
かこいしきもそ二三日とほつひもまほしけき  
たふさうしほをえらほぬめわるといり  
又けりよの日記もたじびしわんしよをあり  
一 ちほしよのふれしよとねい流ぬ  
抄冷眼をかきりしよとほくんとるより世俗  
目よわほつやうなふましとりの族

○今按帯本よこしけしす火あくのあな  
してほくしよめいりすわんしよとりの丁をいふ  
りはさうわののちをぬくともあつはきあはし  
なしん乃こいしよいもろくふいわしよは

<sup>ねんこ</sup>小のまらよおよる人 *Comme* のなこいしよとりの  
人乃まらほつしよとりのあつあつしよとりの  
おしれすらなまきよんれろしよとりのあつあつしよ  
らしよとりのあつしよとりのいもふしよとりのあつ  
乃まらたならしよとりのあつしよとりのあつしよとりの  
ましよとりのあつしよとりのあつしよとりのあつしよ  
らつしよとりのあつしよとりのあつしよとりのあつしよ  
しよとりのあつしよとりのあつしよとりのあつしよ  
そりえんしよとりのあつしよとりのあつしよとりのあつしよ  
こちあつしよとりのあつしよとりのあつしよとりのあつしよ  
しよとりのあつしよとりのあつしよとりのあつしよとりのあつしよ



これら冷眼の意あり

一 恨とあはれありやと云ふは、川を流るる水のごとく、  
人の云く

○今按、洞元集雜下、和泉式部、奇なり都  
これより、なり、年、奇、あり

一 けとらりやと

○今按、和名云、周易、説卦云、其於木也、為堅多心カキナリト師  
多心多心讀余讀余、賀言可達、これより、けとらり、こいふ、と、いひ、皆、以、多

乃字あり

一 けとらり

○今按、日本紀、弥留とあり、と、あり、病、乃

一 お中、留意、驚、瘡、と、あり、多、ひ、と、あり、小、あり、と、  
た、も、へ、は、病、の、輕、ま、と、あり、こ、い、ひ、て、お、り、た、と、  
なり、や

一 わ、ひ、ち、り、く、め、城、を、は、り、つ、い、ち、は、ら、く、中、ま、人、め、け、り、  
な、り、

細流、と、あり、中、ま、と、人、め、を、ね、て、お、り、も、む、い、ち、  
ら、な、り、と、あり、は、り、

一 ○今按、細流、を、先、を、せ、は、り、つ、こ、い、ち、は、り、  
これ、い、ち、は、り、な、り、と、あり、な、り、と、あり、  
や、く、時、は、り、し、て、え、い、ち、は、り、の、意、を、お、り、  
い、ち、は、り、と、あり、















○今按日本紀と此言なり

なくしては

奥入の内はわりののすまむはくろもがてそへんあがりなる

○今按奥入の別をうり今考は六帖第五拾遺

ある内をわりのすまむはくろもがてそへんあがりなる

此等いわりて奥入の款なり何れかあるや

一 小まにいへはじきり言

孟津時花を肌寒將寒あ説也將とて用

○今按万葉と層の字をすくくはじきり言

おおはし將の字をかろ事なり

一 おおはしつとてい

集 日本紀都

○今按日本紀と集の字とつらよあは事なり推

量すはし神集とかしつとつらよあはを定得換

をいれりれつらよあはを又群の字ははし

つらよあはをいれりつらよあはを又群の字ははし

をいれりつらよあはを又群の字ははし

一 今本北の病吹いすぬ風の音よおはれやとあひ

こりやき

細よ本野のま中めん

花露吹いす小涙とり

○今按希染坊の家集と野かゝるわい



とほまきいんどうとまていふぬとこわは人よ人り  
かりて

新羅

わく吹風といふしふれおれおれとふらふらと  
い類之より色しふれおれおれとふらふらと  
よてふ中よかくるふてふれおれおれとふらふらと  
風の音しつふれおれおれとふらふらと

一

りくはよゆきうむつらん半

河百官の社とまをるし禁中と百官といふ

○今葉万葉し此詞多ふと百機城百師本ふしと  
かきく一雨と百官とかがり半れく又百官といふ  
大転りてし世をわき河海の流おれつと

一

いごしーくひの福志けまふちよ

○今按河海し此注し後撰秋中よある追江之夜  
乃又月るよぬきめし神代しつふをといた戸ら  
後拾とわつハ傳馬の程つと

一

いしけくくく

抄寂寞 和名さくしき

○今按け言なりさむくといふまことさくしき  
し不和語のちむ此類おれし葉集しさむしきめり  
不樂とも不憐やもかたりつとさくしきとさくしき  
こいふはわし万葉よまをれおれし字のらわらぬ  
おれしあり



一 いしうしあつし

河影護 ウツクシ 和名 りりし形ふやりの義

○今葉和名を全く影護の字なりんかやりの  
態麩の字をわらふと出さすはまこの事れは  
よるをよおく

一 わつき風あせにかけのれし

○今按拾遺雜下東三條左段大臣の長新  
あはれも陰はゆつておくれろやう葉の葉を  
ちく風乃わつきかよはわてしとてせはまたも  
かたゆせつて云

一 あよかちる揚き妃のかつらいいしと云

筆かまろりわりをれんいしにひひち

○今按枕草子よ忠にかちておは物とりあ事  
物酒よ先してしこすを酒をとことんあのかちや  
かちり

一 いしおしたちかろしと云

河最押立才 イト 日本記

○今按日本紀よ才の字をかろしと云れはく  
きいろるはくこなり今乃かろしと云れは才の字乃  
んは凡ん石なやのさうたならかめらるる  
しと云つてけいおしと云うたててまのわき

○今按新撰萬葉よ奈性めうしと云はひのと云



一 奇のしるすと別 とかせあり

一 今按又の字は太上天皇の尊號と云ふも  
意にわたりおほやけのいめとありて天下となすけ  
しうれうきふへんすおをたぐもよはしと  
ふんよんる人又の字をうしるす  
きいことたかしくて

孟際殊

一 今按毎際よてまきいごといひこの字濁が  
ま故に三よいしとらしめさえとすんを流し  
ふよりつまなきはま一也能くた堪能なりと

不あり

一 うけりて

孟諾承諾

しうかつおまをいふこれなりとあり

一 今按諾の字日本紀よりわりのともせと  
よみしれやとらもをいふこと免れしけい  
出するよおほつちう一人のうけてとじぬ  
もかろゆおれとらもれなりとあり  
叶らぬ  
こよなく

一 毎哉 奥入孟殊の外こいふ詞

一 今按中勢集と春女の殿上人扇たを



この歌も多し流るるにやせしめわくはつたよるつ  
ふれよとていゆのゆゑまゝにことばのし末よとる  
叶るを流る初ハ叶とん

かひらむ

孟 孟 孟 孟 孟 孟 孟 孟 孟 孟

○今按け詞とていふおまへとおへ一云い孟津のこ  
乃しとていふ字ハいゆわたり

ふまてんの女御すく世文もゆかたはく一云い孟  
側くまへとていふはさへしとていふ

○今按けいハおほし菊宴の并ふ

うはくくちこふ山の推かりわたりし一云い

孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤  
孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤

孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤  
孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤

孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤  
孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤

孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤  
孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤

孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤  
孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤 孤

一  
河 髮 臥 州 歟

○今按世二字出る所と一云い和名云唐韻云髻

計及和名 毛止カ利 髻也四聲字苑云髻良一云訓上同 屈髮也



一 じつりきむいりほし  
河雅 日本紀

○今按日本紀ノ雅ノ字カ一神代紀ノ一  
肝雅 舒明紀

ヨ帝木

一 ずまし  
河逸 日本紀 教奇 白氏文集

○今按日本紀ノ逸ノ字トクニあり  
ずましトモハヤシトモハシ  
數奇ハ漢書李廣傳ニ出ス  
ノ音割人ノ遠ア一暗ノ字好乃字  
ハ一ノ字ナキトハ何ノ字トモ  
ハ一ノ字ナキトハ何ノ字トモ

一 河儀軌曰  
河儀軌曰



○今接後知も秘密の經乃中、佛菩薩と供奉  
— 亦此法の儀形軌則を説た人へ所と指出し  
て以ては是は儀軌といふ儀軌別ら經より言ふに  
家ありて名お集の經儀軌多き中よかやうの事  
ごちり儀軌ありこれ今朝陰陽家の儀軌より  
物忌の和訓とりて斎戒の斎の字ともこのこと等  
を以てく立おくまを

○今葉萬葉第十四東哥よ

是の世ふと云はれしなりと云くも福多し此世よんは  
此哥をこころの詞乃けりめを云はれしなりいふに  
福くはまを母してかよふ女の母乃は實分あり人乃

兔を福ふしと云くうかひ福くひて見分しゆを云は  
とうけくおさくおとさう福多し此世よん不寢子故  
子こも女こもにこもえハ母被嫌し又人初お福小  
坂岩部々の文け中納言の君よ是乃ひて福ふまむ  
そめくりりときこくたうしゆして後世文を以てく  
とむたふらりなり又やそけりよ取上あもときこく  
人すくれよしあるまを以合ていつまももわたり  
かよるせハ人さしといふは似たり  
—  
いづもはえ給ひあり

○今接け哥ハ拾遺出四よま上句ねのふとていこと







拾遺抄名四十九日

捕新

物風よものふらあめあきつよりおのめをふりし  
六帖

あつみれはつらつとあつみれはつらつとあつみれはつらつと  
すらしはつらつとあつみれはつらつとあつみれはつらつと

○今按拾遺抄雜書上すこおねはつらつとあつみれはつらつと  
乃す人とはつらつとあつみれはつらつとあつみれはつらつと  
つらつとあつみれはつらつとあつみれはつらつとあつみれはつらつと

くきぬ今すらしはつらつとあつみれはつらつとあつみれはつらつと  
必し

明日音采女

池水の底にあつてはつらつとあつみれはつらつとあつみれはつらつと

りこよこりおほくつとつらつとあつみれはつらつとあつみれはつらつと

注足下し

○今按をこを足下とつらつとあつみれはつらつとあつみれはつらつと  
りあつとあつみれはつらつとあつみれはつらつとあつみれはつらつと  
しつらつとあつみれはつらつとあつみれはつらつとあつみれはつらつと

おひさきこつらつとあつみれはつらつとあつみれはつらつと

尖苗

○今梅は二字何よあつ日本紀あつとあつとあつとあつとあつと  
生前のあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

○今梅はあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
湯原王



うらなまきねも人いさるるを記が法とわしとおもひ  
又同一巻

家持

うらな記妹もさるれはり人めらるるを法をさす  
ともようとのあさけのちとひさるる後乃お小  
得羽重無とかかりよれも表邊乃意れへ乃字  
九重家みの類止音便をよむへき、旋  
一 世よゆらたつきすくね

○今梅萬葉集第一云くもきと鶴寸し候字お出  
第十一よハ多頭寸とかかり候まハわとまはとわれ  
初まり

一 此よまうといひく人めらるるのやおわくつゝい

○今按史記伍子胥傳し鞅をわくつゝふとあり  
一 一ひゆら路へる清ほけいゝとめとゝ

河火影 日本紀

○今秦火影といはれ日本紀よりお葉集十一  
とむひひめけよのさゝらふみの妹をむかひけよん  
一 多かゝと城まつゝて人をとらふとてあやう

○今梅古今序よ多よ書らるる女を人々くつゝは  
人をとらふとすゝ

一 うれまわしとせらよいゝおらかりのひんてい  
○今梅河下ん孟腐えんのあ義腐えんもとま  
あまこわんはわらうてやめ



一 文をけしおほはるはゆきとるをきつてあめいんを  
ちくおわくせつとてさるやうはもてしれすま  
しを

○今梅也りのすしきあめいんをけし  
ねるやうはゆきとてしれねて又み  
やまはすもあめいんをせきとるに  
人とりやういまり

一 ひさうあふりて

細貧相ありりきめ字の流字なりとてしれねて  
親よおほき後

○今梅無美相主人母といふまゝに遊仙窟は主

人如といふこととてしれねて  
を思とわくをわふ人流布の字なり他めかき  
かゝる校合しりるは候なりとてしれねて

日本紀第十三は允恭天皇の后忍坂大中姫といふ  
をとめとて母の清許とてしれねて  
P者のこととてしれねて  
後へるすありとてしれねて  
まゝのひととてしれねて  
なり和石とてしれねて  
四もは坂上二師女とてしれねて  
まは老少とてしれねて



千歳より六指とて後の人乃まらるるかたきなりとて  
——とつひの音便なりとて——

涙もけりてみ

○今按後撰下

いふ所の中此清米なるに——とていふものを流るる  
わつたに——のあまらるるに——とていふらと——とて  
啼わし——とていふけりていふをけりて

○今按さ——あまらるるに——とていふけりていふを  
こしむいふけりていふをけりていふをけりて

一 中ららとてくだりけりていふをけりていふをけりて  
幾処に或後こりて詞に

○今按こりて難のいふ詞とていふけりていふをけりて  
く——とていふけりていふをけりていふをけりて  
をけりていふけりていふをけりていふをけりて  
けりていふけりていふをけりていふをけりて

あまらるるに——とていふけりていふをけりていふを  
たゆみ

啼故とて種姓を——とていふけりていふをけりていふを  
かかすなりとていふけりていふをけりていふをけりて

○今按萬葉第九見免原處士墓歌の終し

處士墓中<sup>ヲト</sup>ニ<sup>ツカ</sup>造<sup>ツク</sup>置<sup>ツク</sup>壯士墓<sup>カ</sup>此<sup>カ</sup>方<sup>ニ</sup>彼<sup>ニ</sup>方<sup>ニ</sup>造<sup>ツク</sup>置<sup>ツク</sup>有<sup>リ</sup>故<sup>ニ</sup>  
縁<sup>ヨシ</sup>聞<sup>キ</sup>而<sup>シテ</sup>雖<sup>ラ</sup>不<sup>トモ</sup>知<sup>ニ</sup>新<sup>ニ</sup>喪<sup>ト</sup>之<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>毛<sup>ト</sup>哭<sup>キ</sup>位<sup>ニ</sup>鶴<sup>ツル</sup>鳴<sup>カ</sup>



け故縁たゞて眼目とては清浄とてなく一義し  
見出さる今の少くもそのまりの少くもあまりの  
しやるといひくは文章も是れくことけりもすを  
くはくかくちの教も熱くもあこひもたひは  
信し不捨む物の意あり

一 ありこころ

河後漢書註鄭玄曰礼記曰后之言後言在夫之  
後故以女謂後達

○今案故以より下の六字おけつる形は後漢書を  
考ふ處に御等といふ意あり熱く本朝文粹等  
一慰少男女詩管徒跣彈琴者問巷称并御倍謂貴女為御

蓋取貴人女御之義也 何漸となくひま女よりおろては

一 あつち清めを

○今按大和物語は平仲はささめこのころりよせ  
ふよりをととを世よんかきこりよりたるといふ  
の武藏の事の一辰たつふ似たり  
うらひをぬし

舌出 游仙窟

○今按游仙窟は舌出の二字あり

美葉第四 家持

百年は老舌出而年余年にも我いといへり 意は海をそと



しつこく下よかほろ人おのりたれぬと云たらんを  
つやよきうそをいひしとていひぬしなすしと  
おれよあをせく葉をれしとてれをさう成りふもれ  
こふもよ成垂るくにくよと津のめれもろとつ死  
ふしとあこころもころれもあしくもよとて  
てさくりわくは多よあしひれを古昔二おんれ  
姫なり老女のす  
なりかあひのの路よあくらしとてつねとあは  
ますしこころあゆて入るる老古出の初と浮て  
遊仁窟と云なり

一 うのむむむとてうらまはしあはれむむむむむ  
よくも

○今梅注よけホ七字異本ありこころなりと  
落しうしをぬかあふよとあそただのひらたんを  
やそあむとてとあふをうとわらんまことと  
みよしだん中しやちまうぬくわられぬ先と  
ふらりのほくぬくねふよやそとあひのあひ  
とらあひふよのあひしや  
いけふゆふにあらさるもらやとてらなやなれ  
しおのつうかあまことあはえはるし

○今梅拾遺卷五  
恨ぬとてうらまはしあはれむむむむむむむ  
おのてまはしあひのあひぬむむむむむむむ







○今梅翁集卷第十八伴家持教諭史生尾張少  
昨歌の中よ云

らふ花さるらふくしれしうのつら乃し  
わいふよふくそますしとら勢ふかろけま  
くまごらへまかくしとわらやわつら乃神  
こしよせく春花ぬめさるらわんしゆさく  
時のこらそ云

さくよ似る

およむおらと

一 義小指也

○今梅け注法より和名云指旨及和名由比倍云於与比儀礼云

季指和名古於与比小指第五指也これ指を熱しておむと

いり

一 新もいふつゝあううたふ

花況花を井いふよわら清らく二條万里水路よ  
あるといり

○今梅精脛日記より熱し久和の明日香よ

一 すきたたわらんかーい

河媼嫉

○け字にけりあふ

一 ころりけしあむしんかすけしんあはる

○今梅翁集卷十二の哥よ



藤浪の思纏ハモヒマツルシ若草の思就西云

一 かく移りのゆくや

○今接後拾遺俳諧小抄のくいて侍る人のほち  
あもせぬらんしふりて人のわやまはるらるるま  
かろりの侍るもや七月七日よつらりるる

皇太后后文陸奥

一 君があふのふのふとばなこいよとやしける言はき  
まぬのもむひくらしくこして

○今接日本紀と喧御音の字とおとむひこよと  
詞苑集雑上よあめひまを男のなりたるまぬと  
しかほしとておののるれしよあふ

和々ろ式ア

一 春せぬらうと物とさう出くりりさといふふるらう  
やとらうと注ひて

注 やとてといふ心又静なる後

○今葉やとやけしめて身事他物物  
ふらやけしとさあわのほより流るらるま  
かろりやとつたれし静なるあふはけとやそ  
さうらうとといふあつて

一 このらうとや

○今接毎毎しかくも毎の音もたわらぬのやの上略  
なり日本紀若葉るしの音よあふとて



新し准らふ處一冊と古語と事とらるはせある恩  
乃重き少なる熱一木りやとたこしとをほくの  
砂ほ下このじしふふのせらるわてふこのふ似れ  
しはてふやといつあふるなり一又延式は身屋  
やわ水なる所あることとかりし是もともや身狭  
こもてむこししし人やむしをへし身狭と  
大和高市郡とわぬ地名也

一 式部はのまは雅君とわぬ事とこつう流ひか  
りやとすうしほゆめかふるし事とこつう流ひか  
はく新とくらしもわぬか  
細圓の方よれまらぬと新と正体とを流ひか

孟方曲之丁くはしかりぬ西方のわのとこらへ  
ゆひまりとたつて流ひか

○今梅古流ありらぬ和名抄云野玉梅云類 音狭和  
名豆良  
一云面旁目下也 類とつてゆれしけりしゆひり  
ゆひりまのわくといふ世心なる梅子とを交  
ゆる新とおよわする事とこらいつやめれたゆれ  
しとせらるはゆひりもたのゆれといふ方申亡切て  
假名はくやまきよらうて万葉集とわは波の假名  
用也今ハけりさかりらるとらめつう流ひか

一  
河勝人妙 細姫 イナ 日本紀







なまはこれの原ふとあつて漱とつふ原えと漱と同韻  
あて通と取原ふ原とせも之をとししこれなりす  
えてかゝる一筋まはえさうねねの海も根とれら  
と乃わやめの根よりせまを深くあふまをく忘れ  
又いふむあもよみかくはま葉もかくはま縁あはれ  
なれし川にけとさう

一 九日のえじよすみのわん詩人まむおむむはは  
はあきとさうにまゝはあはれからせがしあめ  
○今梅苗の露とかの菊氷かたにしとせてか  
かくはをうころとせこら  
はきりりいひあはれ

注かめしれ詩とあひあつていひさうははれ  
とあつ

○今梅苗はあはれをいふまははははは  
と同一かくれ詩を思ひあつて作らんとせよ  
かく一奇よみかくれはとせよはははははは  
あれをけしはははははははははははははは  
とすしとすし

一 あこもあつて  
河吾子日本記

○今葉日本記のいふ濁音の字は用はれあは  
あきとさうといふ同約とて通す自然の通してあは



いふとくはれし詞と又目録と通されしはきよきこと  
のたしりやもそ残ありされしわともはこころいふ  
一 ぬつころるうーり

○今梅万葉の七上馬とぬりしとよみされあつ  
き人のうらむこそをぬりや一けされしうれしうもさ  
よあけのゆきあふくしてさうつとさうとぬつとさ  
末摘苑の巻よみらぬらふ雪のあつとさうとさうと  
ける紙よみらふ事とりわきておろくも流してさ  
人のやせと紙のうらむこそをぬりしとよみくもさ  
るつとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
一 人のまはれしはかきこけおまめ

○今梅注ハ似てけしんじりしとさうとさうとさうと  
とに人えあましはぬひてあてたてするん事ハ  
おろしりけよとんあはとさうと







原風をたらしむるもよきことなり又まきくみたる原風を  
まきくみたるもよきことなり又まきくみたる原風を  
まきくみたるもよきことなり又まきくみたる原風を

一 かのぬきとてしるすもよき事

○今梅日本紀第廿九小岳髪干背これよれし  
ぬきこれるるもよき事

一 今梅のしるすもよき事

○今按世宗全篇伊集集よわいせしよ古本小は  
ありよ今考りよわいせし

ういせしとてしるすもよき事  
いれりよわいせし

夕顔

一 赤いあやひてしるすもよき事

○今梅 徒倚 日本紀

一 かのぬきとてしるすもよき事

孟 綱鑑 日本紀 選 延喜式

○今按上乃字あ書おしめ

細くは頑カクシテ頑愚のらあらなりはの字  
清てしるす

河をさすかきさるるもよき事

いづかきし詞かかればとてたもわと源を  
いはりしるす











○今按調行の字何よまんえさる歎世詞を此れ  
物終なきのみかえぬや

一 かのめさぬい

細かなさぬい

○今按人形さぬいをなむさぬいさぬいさぬい

一 ちけのあてつ云

河りあひさひしうい

秘あをさうりの事つ云

○今按さひしうの軽慢めらむさひあけあをなけ

や新らさむいりばさうりのらさる物

一 六帖

一 ほとくよつめてさかれとあひまじとあを

義不重生男重生女 長恨哥

○今按さくに川長恨歌の句心不叶

一 みれものけとこあさふらやふ

孟橋の寺乃中屋

○今按川下の宮室紫第十六と長屋にかたり得きり

一 右辺の君

幾ころとら官女とらやまてりし御女孺こととらふし

ふそとと人をもむくはせりし御女孺下の御女

心殿らうとてら

今按さひくはとてりし御女孺とら後ハ語し礼の



況りし事よ宗をくらとつれも同し詞とんり  
後拾遺よと海部ことといふ女の名わり 宇治拾遺  
よ地藏菩薩を地蔵とつれといふ死と物き  
事はよりとてといふ事は通後口難すやとて  
死しそといふと女の名乃やうよりとつれと死  
りあり人の物後少も事たすよやめしと也  
こわり

一 たりといふ事車をとんすしこ乃といふて

一 今接人海とともるんとを字たらしむ死  
たしすといへてかのかたおひひすしつるく  
注倍よおひめしふといふらん

○今接世海わはまよりけおひあたとをたひるぬ  
あやけしとあすといふ事

一 今接月けひしとあつるしと強とれくわんを  
○今接

君とてあましる岩のつと海より月あつるにを神とぬき  
かりといふ事

孟東作稼穡 和名田宅 日本紀

○今接より小と事れし日本紀よ田家となりこと  
こはあり

一 うけくつとあまの事とあまといふ事とあまといふ事  
○今接よあまといふ事とあまといふ事とあまといふ事



まことえくがしりふりこれとんをもほよと生之を  
あきしりへるや

一 少くはのほりのあたらた

○今葉ちらたしは言痛も事痛と  
きてあき洞のふかしく取あう人のえと  
半くしれと事おほきこと今多事あま  
おほきいふらなりとり不注は不叶

一 少くはあくわくう終ん事と

○今按 ユクリモナリ 不意 日本紀

一 にいかに書くれてゆけ

○今按物とらふまき前表あまて事あや

一 おきあう川

○今按水原抄あり奥中河のわつ流は久き小流之川  
ここのの尋は萬葉第二十二のありて於吉奈我川波をり  
日本紀第二十八云男依等與近江軍戦息長横川破之  
延喜式第二十一諸陵式云息長陵 舒明天皇祖母名曰廣  
姫在近江國坂田郡  
六好く八川合て考らよ近江國坂田郡よわつ息長河也  
至紫よ奈我とちりも長よて中よわつぬ流く小ほは  
あ名あて息のたれ物たきいあくら河よあたりい  
越万葉よはおきその風とていり延喜式各郡或は  
近江國横川源を横川と息長よわれは息長川  
こいあまらる



一 けしはあつしういさうりて

一 孟集 日本紀 撰とよまりつゝ

一 入る人そく録しつゝあつしういさうりて  
わびひらゝゝられ流ひらる

一 幾夕白のあつしういさうりてあつしういさうりて  
のらうくおろしきいさうりてあつしういさうりて  
よお推しつゝあつしういさうりて

一 今梅ノあつしういさうりてあつしういさうりて  
わつしういさうりてあつしういさうりて  
すけいあつしういさうりてあつしういさうりて  
きつてあつしういさうりてあつしういさうりて

一 月れつのはけしき

孟集つゝあつしういさうりてあつしういさうりて

○ 今梅は万葉集十一の巻之二の句をふりて  
何れをいさうりてあつしういさうりて  
川あつしういさうりてあつしういさうりて  
よけしき

一 随分をけつらうりてあつしういさうりて

○ 今梅万葉集四  
梓うつしういさうりてあつしういさうりて  
同十一

とやあつしういさうりてあつしういさうりて



一 物のあはれきびしくしめあはしむ

○今按万葉の本所ふいふに「言はれぬまはしむ」とあるに  
みゆきとくみく

孟日本紀云：

○今按国象此云美都波ふとくじし假名実之又  
くじの詞よりみゆきとくじと又なるはとこそいふに  
日本紀と引説と違ひ

一 今按日本紀云大捨燃燈

○今按喻日本紀

一 今按日本紀云大捨燃燈

一 つみのほやよて

○今按兼輔と境中納言といひ大和物終は隆常婦の  
ほやよてと云ふなり

一 今按万葉第十五挽歌云いめのしほみちみちの

そららよとよまこしり君とくの川に  
まてゆけとをかくれそぬをそそやまふつら

新古今恋三 道信朝臣

うねもわぬ我方のけふとぬのうらまを清めまくれ

盃放埒いづつよめやうらまを清めまくれ



○今按これいけお終よもほき初くわゆるもわら委  
 之古今の心とてなとてしや  
 の可よん及おとて  
 江と日本紀の崇神紀は溢の字を用ふる古事記の  
 波布理と假名とわかれり孟津と放埒とをい音出て  
 とうらひのとて常ほをい初まりくまことハ人まよは遠  
 へとられよまといはふふやううらりしあれを  
 俗よ好色をい放埒とていふのいふまこと死  
 らにまといつてまはるこいけよわくをれくてと  
 きもいけよわわらうこいけよわわらうこいけよわ  
 もまを死わらうらうまわらうこいけよわ  
 川の事とていけわい

○今按敏達紀云於是絞糟等懼然恐懼乃下泊瀬  
 中流面三諸岳瀬水而盟曰云々  
 足をたすよおのひまらふ

○今案万葉  
 左伝すなれもあはうらわらうつらにはあとも  
 ままもみん東伝のいことてしやうらわらうはらひあきも  
 左とゆひはよこの里は妹をまてこわらうつらひあきも  
 下世のあはうらひあきも  
 浮世あはきもあはうけしもらひあきも  
 一 所つてあはきもあはうけしもらひあきも

○今案万葉集







をほめ給ふらるるに—とて活て朝陽の事こゝんと  
人より申すのけしきに海より  
一 行らうす海—

○今葉よりいそいで河之為葉より十五日わい戸より  
—とてこゝの事おもしろくしてなり

一 四十九日

細いつくほくも初よりわい—

○今梅拾遺より名系轉相四十九日を音より隠  
よより免れ所とわきかひ音御へきりけ次よいく  
幾十よきととて改めあしあしはらひんぬき  
と改めあしはらひんぬき—館の字をう

一 蝉のねもたらんぬき

れよ申すをえれ—いり朝よむいき入六日七日を  
と作者の音改めてやもけりらん異人おしおれ  
今梅後撰意四つ—くまのよきとこのよ  
いりいりてあしきかきと—つ—改めて

平ふらむすめ

今おそ梅よ—はて蝉めかき人んととあからり

一 源巨城

とて新身とてあしきかきと—つ—改めて



若むらさ記

一 あり人きく山よふせ

○今梅山とていふ所もわきしこれおめしとてさうしつり  
河海とて柴茅二持統天皇の山とれひく雲とて  
とて(ふ)弁をいしとてさうとてせり合しとてたす  
しや明日香園今とてさうとてさうとてさうとて  
わさ山とてひくくくくくくくくくくくく

一 山の根はまはらりよて

○今梅山とて赤人の弁とていふ所もわきしこれおめしとてさうしつり  
河海とて柴茅二持統天皇の山とれひく雲とて  
とて(ふ)弁をいしとてさうとてせり合しとてたす  
しや明日香園今とてさうとてさうとてさうとて  
わさ山とてひくくくくくくくくくくくく

の奇家集ははらり玉葉集も入ま

一 さる屋きおつらてすせたくすひ

○今梅山とて赤人の弁とていふ所もわきしこれおめしとてさうしつり  
河海とて柴茅二持統天皇の山とれひく雲とて  
とて(ふ)弁をいしとてさうとてせり合しとてたす  
しや明日香園今とてさうとてさうとてさうとて  
わさ山とてひくくくくくくくくくくくく

一 岩ひらりありはらり

河寛ひらりありはらり

○今梅山とて赤人の弁とていふ所もわきしこれおめしとてさうしつり  
河海とて柴茅二持統天皇の山とれひく雲とて  
とて(ふ)弁をいしとてさうとてせり合しとてたす  
しや明日香園今とてさうとてさうとてさうとて  
わさ山とてひくくくくくくくくくくくく

一 近海の中おとす



○今接佐理の久氣は清むらうてわかれなを  
おめいてかゝる死

丁あしおくはわりし

河奥 日本紀

○今接日本紀の中はおくはるしりふた葉あり  
万葉よおくすつておくまけかきよる今接河奥れ  
のちをやらしはめ

抄中もあは里由くて妻よのたよりたやしらんは  
はあし極しなり

○今接注得きうらなむひのあひむいぬま  
よよりうらえんをけりやうまなくはあしあこいふ

んくあ染よ思遣しよめあは皆思ひよのしりあつら  
相像はむひやふしとあふらあわす今あむさや  
これは同一遺詞遺情遺積ふしつ

さいのころ

孟去何比

○今接さなるしを伴は幾と通すれしあつら  
去何比ハ胸臆のゆり字

人こかいしうらまのまこらなるまこいしあつら

○今接安羯羅ハ梵語よりハ海と翻すれし  
しうらまの安羯羅龍王よりあまむしあハ万葉  
第九よまぬあの中はけめいむしあつら







蜻蛉日記一人の家の人をいふはつとよ月よ来月の  
新うつらな家と女もいふはつとよ月よ来月の  
人あり

一 雲井よりあちくはなをよまよらくみそり見ゆ月影  
名をよめ木葉の老とももろこいよちりまーとけき  
紙しつりといふ

○今梅朗詠野草芳菲紅錦地

一 君もよめ木葉の老とももろこいよちりまーとけき  
おく山の松乃こほを紙すれはわけくまをぬいめはせ  
細山さぬくをすれはわけくの句法し

○今梅定家口の寄るまふ葉芽十一

わ川のさかたをわけきそとふい人をなごうも  
世哥と平哥の年体め腰の句ぬきてといふを今あつたの  
すれはわけくといふし加下句花とてわけし誰とま  
らん公はつたの花より省のわうなるけきといふ  
をとりにてしつ君紙といふしわくしきしれは彼腰の句の  
けし哥とすれりといふわけきまといふてふは紙被白  
法といふ顛倒せり玉無津と定家口の文の下句紙ま  
えぬ花のま紙んみわしわの蜻蛉日記の湯紙傳寫の  
得たわく山の松乃こわとこま万葉の芽十一

奥山の松乃板をこひしむもまやかぬのりいれやん  
おく山のほまは板をこひしむもまやかぬのりいれやん



お山のまはれ極楽をささぐ我ひいんよ余てなまね  
あまのまはれ奥山はわらわをばはくつけりうたれと  
つげやうりやうそわらわをひてよあり花のうら  
敷可後撰ま下 三條右大臣

きよきえ一花のうらけいれは神てよはふさほり  
無風集

うすくらえまうと花をいひてはあまをさすれ  
拾遺

一 さくら花のうらけいれは神てよはふさほり  
すきくさる花をいれ

○今梅透ける体よ又細は結る体は河海はゆる  
美葉の奇は不叶

一 ちんちりのつちをよほくすりともさして

○今梅竹取物語

今いそわては花をさすりてまをいふたあひあはる  
かそつちの葉をいふ

一 まいしめ花のわらわいさうまいしあすもは花は  
注 花のわらわいさうまいしあすもは花は  
葉のなまをいふと乃いさふの海にけい  
下んと強き奇は花のわらわいさうまいしあすもは花は  
○今梅源氏の奇は花のわらわいさうまいしあすもは花は



上紙論て死の縁に履るまゝあらふこと難くさうけ  
ふれ尻公の死乃あすうとらふやそ業に死のあすら  
まにせいにまうまゝのりし業よよせこたのうしひの  
けさの清ならぬものも死にんまゝのうしひの清なれば  
りしてまやまゝのりな色いりのな今よ

君より我君はよま業あはれも山はもまみらより  
後撰

春れを死ん人あふふ他世道の履るまゝのま  
上の注哥よあけ時死の死のよまのまゝのまゝのま  
してはまのま

一 けふいく〜とあま〜

○今梅氣不悪とてい〜

一 奥君死にそ〜

○今梅此哥何の〜

六帖又

〜

同六

我君よま〜

一 〇今梅家らの〜

何のら乃身は強て〜



いづれもさるりらし

河事計<sup>カリ</sup>為<sup>セ</sup>与<sup>ヨ</sup>万葉

一 ○今接河海よにへらるる葉の句をたるとけりせよとて  
心をなすしげきと信<sup>シ</sup>日本紀<sup>ニ</sup>慮<sup>カ</sup>計<sup>ト</sup>測<sup>ト</sup>方便<sup>ト</sup>好<sup>シ</sup>  
みなたるふ歌とよきものはるる同<sup>ニ</sup>

一 ○今接六帖

一 夕されの巻紙のりちの言はねくめをとならもまらる  
たる<sup>ハ</sup>人<sup>ト</sup>や

○今接これと信あつ万葉ナ<sup>キ</sup>ヤ

一 浸入のめしげの舟をうりぬ我よよまあるぬらんも  
人れをのめりぬれぬらんを我のつくろふ  
かたしなまはらうし<sup>ハ</sup>前<sup>ニ</sup>あ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>下<sup>ニ</sup>今  
けりえこな<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>舟<sup>ト</sup>を<sup>シ</sup>今<sup>ニ</sup>ね<sup>レ</sup>人<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>  
りけのほとら

一 ○今接後撰

六帖  
わかれはむしの葉のつるをよみぬるむねをよみぬらん

兼盛集

ふれ葉はむしの葉のつるをよみぬるむねをよみぬらん



一 今梅史記イカガシ 櫻傳云上獨枕一宦者臥日本紀第六

垂仁記云時天皇枕皇后膝而晝寢同仁德紀云俄而集

一 今梅史記イカガシ 櫻傳云上獨枕一宦者臥日本紀第六  
細カ 梅史記イカガシ 櫻傳云上獨枕一宦者臥日本紀第六

○今梅史記イカガシ 櫻傳云上獨枕一宦者臥日本紀第六  
とけ細流よりゆく程に流れてはるるもさよせらるる  
か納まり也一よきと控ていふは浦とよめるよて  
又えまの家集よかのえらるるを隠しよるる奇  
かいりこはけこ舟のえらるるをせえり  
おれせも分舟のえらるるをせえり

きんはとに流る程の久しきとあり若き人  
やけらるるおとよはるる古事記も武雷の神建御  
名方神の流る程の久しきとあり若き人  
弟二の奇は葦若末乃足痛吾勢とあり別は江

一 今梅史記イカガシ 櫻傳云上獨枕一宦者臥日本紀第六

○今梅史記イカガシ 櫻傳云上獨枕一宦者臥日本紀第六  
けいひさのうへよほこのころれよ

○今梅史記イカガシ 櫻傳云上獨枕一宦者臥日本紀第六  
垂仁記云時天皇枕皇后膝而晝寢同仁德紀云俄而集



別皇子枕皇女之膝以臥

万葉集弟五琴娘子二奇云

いふわらひの時ふも多知ん人のひのころゆらうし

同弟七寄日本琴歌云

むよ物とむれしほのふとぬくひかへはうらうしむを

いふしうきうしれを

○今按霧截といふ詞を倭ようせいふ詞を倭用

ようせい截ハ截流ふといふ例ハ遮の字をばさると

いふと障截今ふしうきうしれをといふ意ハ本

ふよハわらひはうらうし用をいふやそけはまのあし

ふれめのえきうらうしれをいふやのちたせとあまらう

一 朝何れもきうらうしれをいふやそけはまのあし

○今按霧の立はうらうしれをいふやそけはまのあし

二

妹のちのこころをいふやそけはまのあし

催馬集の二奇といふれはうらうしれをいふやそけはまのあし

一 立はうらうしれをいふやそけはまのあし

○今按音のゆきこころは霧の物と立はうらうしれをいふやそけはまのあし

恒のふしうらうしれをいふやそけはまのあし

はまはす人の恒なりサ臣家万葉下

君さんえんしやけしれをいふやそけはまのあし

やほしうらうしれをいふやそけはまのあし



若丹集

山里に書けしうたの巻をそとにあらわし、今社をたは

一 差の巻さし

○今梅後撰

ふさしつゝさあふたの取の巻はつゝいふいふ

一 ことしつゝあつゝさあふたの取

○今梅わいしつゝいふたの病のり桐壺の巻もは

詞はつゝいふ海は央の字はあしなふとつゝいふ

の巻はつゝいふ万葉

人守あつゝいふたの巻はつゝいふ

あつゝいふたの巻はつゝいふ

世後の新しき事十二小を入り、世の新しき事

とほこととらつゝいふたの巻はつゝいふ

乃らつゝいふたの巻はつゝいふ

とらつゝいふたの巻はつゝいふ

たり央の字はつゝいふたの巻はつゝいふ

とらつゝいふたの巻はつゝいふ

細衣架はつゝいふたの巻はつゝいふ

○今梅転輪日記よとつゝいふたの巻はつゝいふ

あつゝいふたの巻はつゝいふ



源註拾遺卷第二

末つむ花

紅糸賀

花宴

あしひ

賢木

花散里

源磨



末摘花

性靈集に統前王左守といふ

一 ころしかり

物語中、這曰前よあり末とありてはとも今こがれ

ころしかり

河王家每等論 世説甚非也

○今按論ハ倫の字と写し誤れらるる世雄每等  
倫妙智無等倫ホムれおのこして王家每等倫の  
義揚とてしる流るるハあつち熱しともんえん  
まゝあつち又じの字をねすてしとるこ下へかえむ  
ゆゑに理之百済王禪廣乃末と百済王 といひる



改畧して王といひけきい王家といふを——さてそれと  
音便よむんをいふよは信馬樂といふは信がといふ  
例ありとていふらめらして王家の藩スエといふらや  
末よりして長くいふてらくはと信ありつとおはゆ  
りこは用いへ——

延喜式の中納言貞世王の末と王氏といふは又桓武  
天皇乃河内裔とていふことこの親王もその氏を賜  
らてをいふといふ皆王氏といふや王氏と王家といふ  
ちくちく乃わしといふやめて  
孟末稿乃又えまう

○今按世況注によまはるる各部の補綴のよのよちく

君とといふはよ末稿の半をいふは物きやれ  
又この況乃くはははひらこのみといふはきや  
なり又顛倒せり

一 きんをりなひらにひらひん

○今按琴の序の物なれはひんといふ人そは  
萬葉の石と遠は人郭云はわらひ人後撰を郭云  
を詩人の詩をいれくはひんは物終の末の稿をも合  
いひつるらんはよりしていひんは歌のいふは物なや  
みつのなめて合ひはるやしてあらん

細河海詩のよ云は但酒のよあてておは

○今按細流の況は但詩をわすりよ好みなりはるも



せんがうてか敷へく酒もおこふといふまよあしねを  
詩とあまりに作らんより酒きすこし好むとてうそ  
か敷へ

一 うしあわてふがうしあわて

一 ○今按かうしあわてはかうしあわての物おのれはて  
しけりこらふ倍よるこもいふしあわては治る方  
かうしあわての物を治るはかうしあわての  
こらふえかうしあわて

一 ○今按和名集云兼名苑注云竹簫以灼及今按所謂高麗用  
此字和名古萬布江  
除吹處而六孔之笛也此笛の事、但かうしあわては  
ゆまおらもおほえのさすの笛と云番より作て来ると云  
歟

一 月とていふむけし

○今按万葉集に月とていふむけしと云れは月の西と云  
し中務の御歌に月とていふむけしと云れし  
むしひけしと云れしと云れしと云れしと云れし  
すしひけしと云れしと云れしと云れしと云れし  
はひけしと云れしと云れしと云れしと云れし

一 月とていふむけし

河六帖

○今按此等月とていふむけしと云れしと云れしと云れし  
月とていふむけしと云れしと云れしと云れしと云れし



一 廿五日とむるてしほの勢の月といふに及ぶ及ぶと  
なりつゝのちやよきしほゆすむあつねし

○今按後撰

一 わさかふら此星のひれかきと申すくまをま  
いとていふまゝまはけぬん

○今按每言進退あ説の中に每云と用へしは  
小待返の返奇まの流めり日本紀よ棲違

進退とあすむてしとくはつ南と点しと執所  
なけまはさる義かたれし

一 河がゆたはつて

○今按和名云廉頗強飯斗酒肉十斤  
飯音符萬及亦  
作餅詐強飯和

名百八  
伊比

一 えくこのやうはもつあたるは

○今按えの字は川くくしてえつげ給ひはく  
くれぬ表の月まの星をわいせあつるはなれま

○今按後撰  
信明朝信

一 ふひりまはあつるははもふむの月と名ん  
業の派の年へはけははひあつるは

細光は司事

○今按灰あつるしててまはまこの流あつる  
おくれぬあつるをえつるまのまはれは  
とあつるは











俗よる榴鼻といふれり小兒とい和名云唐韻之症  
昨永及和名逆岐美小癩也者よはふといは物く赤くしてこぼる  
はぬくこおる物なれし丹黍キビといふ名ありて  
父を雷とつしくあうてこぞ

○今按けり日記よおれをさるつし記おれ  
美柴弟十六怕物奇

今平のこをうきいひつあ可し而長くしこぞ  
物うまのこしきぬいさきよし

河又拾遺云中宮安子うまのかきぬと云先代將  
入道横川よしん侍多まつけり

甘ぢれ山いさこらふまのいかにぬ風をせし

一 此奇拾遺よされ

一 おきれのいしきと出ま

○今按梅井素丹といふ人のよまをゆて聞か  
せぬ古とんしきいしきとあ

一 け小きれしきぬ

○今按帝本今いしきれしきしこら新  
物みくけ小といふ

一 けてやしきれ物めさる

○今按狂キヤウてしきる危し負て

一 わいこえ

○今按厚肥ウヘヒといふあつは派人のうえ



たるふはれきまり

かゝ衣君こころの

○今梅君らとつげり

袖すれおきん

○今梅川おひ万葉集下あり

いらに花と見かこ

○今梅川お竹おまを歌集上及下の句に古今雑体

くれあふよそありこゝろにめされとこふおのまり

奇よ歌すくくは

河足如 白氏文集

○今梅足如身いすすみあこころありちや水め字

日本紀と記すもひいあることあり

くもや

○今梅字活拾遺よは口としもくもあ

奇よんのみよや

花と見ん人こよよめり

○今梅源の我と福んあよよとやけ衣は流り

らんしあり我と見むとこ不補殿

きやういひけ

○今梅和名云鏡臺鞞也左成云加々美此和名あれ

か昔より音よひるれありや今と然いそ又云

嚴器信用唐櫛匣三字

賀良玖 師介



一 うんくつにさおひよて

○今接美第第九云八年兒之片生乃時從云々  
は物終末よはかすまうやもいへて

一 うんくつにさおひよて

○今接神代紀は閏年とあつふくくさる  
ててわつて

○今接して居くわつて天阿切多りまはけめく  
かくさつへまよる世と人あつふくくさる  
な色にむらあまの末摘とてんくめておぶくま  
紫紙のうきこいも海のゆよおひひかめい集めら  
をくあつていれ

一 あつあつにあつて

孟わあつにまはるる海しものこ

○今接はなれぬ敢て堪し心をひてまはるる  
あまのたはらぬ人くまきこりれはなれ  
んくまきこりてあつていれ又或はなれ乃  
字あつていれぬは鼻をぬふのまはれまは  
るるんものこいり世あつていれ日本紀の  
應神天皇紀は肖世云阿敷とまこれには物終乃  
末よあつていれぬあつてあやかるる不詞なり似ま  
字わへていれぬるまはれぬ肖乃字の例れまも  
讀屋しまはるるあつていれぬあやかるるあつて







紅葉賀

一 常よりむむるしとて終ふ

一 <sup>分</sup> ○今按むる源氏より所よりわやいり  
かゝ人の神々し

○今按おひひふくを中とかくかめ  
立居つけくこと舞の立居れりせく  
たしよあ居るはけしとありしやあひ  
おくわかれしはけりふり万葉

立居るわもあれを妹と名ねらばは  
同立おひ居るはあつたあつた  
同十二

立居るわもあれを妹と名ねらばは

一 かしら

孟垣代入舞園之垣はまき此内にて  
○今按此注おけりやて下よあつた  
陰に四十人かひいひあつたあつた  
あひるね風 のやあつたあつた

河海云長煉御笛譜云  
時花云垣代よ

此後このよきなりは樂人を  
日本紀武烈紀云立歌場衆 歌場此云  
宇多我岐 續日本紀云天  
平六年二月癸巳朔天白皇御朱雀門覽歌垣男女二百



四十餘人五品已上有風流者皆交雜其中云々又稱徳  
天皇由義宮として歌垣と沖壁とあり半と記さ  
行列す終の垣のふくむまは新垣といふ今垣代と  
いふは是らる也

けこやう

河清 カキカ 万葉

○今葉万葉は清の字はやうこまおほくよとけ  
やうとも免るやれ キカヤカ 氣清こふまこ  
うけしめよれいふと  
孟咒咀のふふ

○今按日本紀は咒の字はかゝ咀の字はこゝふふ

ふふとふふと先記のやうに キカヤカ 誓の字 祈の字と  
ふふとふふと日本紀古事記の言ハ善悪ふふと  
ふふとふふとふふとふふとふふと  
ふふとふふとふふと

○今按日本紀は問の字とむとまふとふふと  
此畧語はふふとふふとふふとふふと  
梅の善いけのふふとふふとふふとふふと  
ふふとふふとふふと  
いふとふふとふふとふふとふふと

○今按後撰

いふとふふとふふとふふとふふと







孟母をいふおれといふらん

○今按女房はとわきといふ物きげん毛阿切麻さき  
は、ゆきてまねといふ

一 かりきい道ちまて

○今按こいふらんめこくおとほひいふともいふ  
紙くうてこいひるは紙しあわひのらんり日本紀は唯  
況とこいひいふといふとてゆををねひい合といふ  
河海の央の字あるをとてし書

一 めりこそなめしこいひ

引ひをなくとるうはうれあはれめりせ交はれは  
○今按此弁はあつたふりこいひ信明家集

新拾遺文

新拾遺文 新拾遺文 新拾遺文

けいぎよそかけりたりおれ

一 まさかおれ物とてせりひいひ

引ひ白髪は黒髪よりいふとていふといふおれ

○今按これいふ紫茅四坂上師女文に拾遺にも入

今按白髪は黒髪よりいふとていふといふおれ

一 けいぎよそかけりたりおれ

細川 けいぎよそかけりたりおれ

○今按これ新勅探雜には拾遺にもいひ

不知とておれいふ昔なりといふとていふおれ

拾遺にもいひ

よみ人



かまふれくさいふう此橋よりあまふくし中やたえ  
たれよそかやあもをる

一 けしきしひめい

孟 殆也

○今梅とのことすみ下の山城湯くくわしく  
あやまらん鼻よまらあやうけせんたつ  
かふは信よふまはあふく程ことあふく程とある  
うらふてあふく

一 ぬしことまわす

○今梅遊に空屈推の字拂ふの字ふふとよふ  
あやふめいあや

○今梅日本紀と安とぞれとらあ

一 新よふくしめ

注ししきりあ

○今梅此注不叶いしうふんよとあふく  
あふくあふく

一 廿余年

細音と流あり 孟しつらあふくし

○今梅細流はけく屋しあふくあふくはあふく  
あふくしあふくしあふくしあふくしあふく  
あふくしあふくしあふくし



花宣女

一 千紙わ〜〜

細川が紙のしこりと紙のくさよらふと紙  
万葉十七 黙然不有

○今按世川が今の年よのめいあしこふと紙のし  
やあり軒之名種おこかきしれハ胸の白き深なり  
奈句古紙よの紙あり〜こふ〜や怪怪日紙を  
少と世のあり紙も彼集中世河の紙よの  
こ假名も〜しれハ今の紙計ハ直の字はこも  
か紙も〜しれハ紙わ〜こふ〜あ〜或はよ  
紙わ〜しれ〜と紙のし紙ふとあ紙を

遠へらよのあ〜ねと紙わ〜らえ〜らよのあ〜す

一 弘徽殿のほ〜の

○今按和名第ナ六唐韻云廊音郎和名保曾工乃殿下外屋也  
第柒第ナ七ハ納殿とけり廊の字乃和訓すあ  
らけと〜

一 おくのく〜戸と

孟くふ〜と〜紙〜か〜め〜  
万葉 長歌

○今按万葉長歌よま〜か〜お〜れ〜第二十小  
下総国防人〜哥よ

ひ〜な〜の〜は〜も〜た〜〜か〜め〜〜姉と

此哥のま〜あ〜紙〜紙〜も〜し〜け〜あ〜ら〜あ〜ぬ



半之文と云くわる戸な色凡山梅秋露ののやうに  
この字通りては樞戸と云はてはあやわらん  
うに男世よやうと消ふと

○今按後撰逸二はりあて沛少とつらうにれい

中お文夜

きよ色と云れは物をまほくせいのちをくうと君と云う

小人君

我れハソのことほく尋てこの世ははまぬと云は

頭中將のとよあぬ

河不<sup>スリ</sup>崇<sup>ス</sup>万葉

○今按万葉よけ河

一 巾みもまなうさくよ

細景迹 花形迹

○今按花身よ今文景迹の二字とハ形迹と釋云  
少阿うまハ形迹を用し上を濁し下を清へる詩文  
章の秀逸と教言策といふ此字のま物

一 そくくうまわれくごま

細そくハ新の字くむん

○今按新の字そくくといふ先教の何はありそ  
なされとおはつる音もくははかこし葉あり

一 姉さくくくく

河不<sup>スリ</sup>祥<sup>ス</sup> 日本紀



○今梅日本紀より不祥を誦るる一尾流里女は  
わらひとて多敷くたしめたること俗におも  
す事記八十支神御歌云  
古事記八十支神御歌云

奴婆多麻能 之踏岐美祈斯遠 麻都夫佐介  
登理與曾比 淤岐都登理 牟那美流登岐  
婆 多々藝母 許礼婆布佐波受幣都那美  
曾介奴岐宇氏 蘇迺抒理能 阿遠岐美祈斯  
遠 麻都夫佐途 登理与曾比 淤岐都登理  
牟那美流登岐婆 多々藝母 許母布佐波  
受幣都那美 曾迺奴棄宇氏 夜麻賀多介

麻岐斯阿多尼都岐 曾未紀賀斯流迺 斯采  
許呂母遠 麻都夫佐途 登理與曾比 淤岐  
都登理 牟那美流登岐婆 多々藝母 許斯  
與呂志云々

い甲のゆりのゆさしす八倍より同しゆゆ又  
若葉芽十八は天伴の池之主なり家持より社代を  
のちしきとて

一 われをいふよかりぬ人しやいしれゆりながら  
ゆるるま







従ふその末乃中の節しおわく一草るりたあう為  
りや

一 うらむけをいふ

○今梅倍よおけをいふとて相まかぬ  
とふ此特せぬや

葵

一 すらしむるなりなすを

○今梅節異なり

一 所く乃節しな

棧敷

今梅日本紀上假とさす記とあり今の

と記なり棧敷ハ暗推の字歟

一 おゆと人

○今梅後撰意四又拾遺意二

忠房朝臣

君の名めいりしこと記ありとて山内を人よりたえ  
や



一 ひいたしむめおくわ

○今按和名鈔三漢書注云副車曾内久流万倍云北度太万比後乘也

一 比くろり車のこころよ

○今按同鈔云説文云轂古祿及漢語鈔云車乃古之岐倍云筒 陣所湊也

一 めとあやなり秋津さこしかり

苑めをわやとらうくくまのの文とらやの心なり

後拾遺集後新奇

ゆら系に流るるこころよしすいゆわわおふけさうのき

けめあやとあやれきらんし紅葉の影をとりて

らんかゝゆ魚

○今按こふじれらる奇を後新の字よわくは此門

衣大匠のろくきこそお葉をよみ流るるがうら後拾遺

身二十御潜よいれりめをわやとあやしくんか

らう乃詞しこころおれ

一 白紙つくとてむむよあてり

○今按土依日記云とつ日と紙つらうのわやとらわく

難波はふきそ河原よらみれ人と女おれむむ

ふ紙あてふよらふ事やらふおし又大流と流しこころ

くけへり通望いたすけを秋新例

一 いふおれしうんしん

河愠 老子経

○今按柳菴子とらんしてまもこい入けおころふ



くしきもいふまにわれ一詞を屈乃字とくは  
字とくと同類をて固を慍いふとあひ今めん  
と教よりあまのうら

一 あめのうらよはこあつと

○今按新勅撰神祇 赤院とすあつて畧

系於赤園白右改大臣

春と初めこれらものをいふもあめあつらよあひとあつら  
是ハ昔のころより後のあつらよと都れはあつら  
よのいひきこも今もよなるといふあつら

○今按後撰

あひとあつらよのいひきこも今もよなるといふあつら

中誓家集

一 ○今文より老のなりのよと古日野の人もあつらよといふ  
こくひなまきとく

○今按弄 ニナクル 日本紀

一 たけくいとま

河猛幸 ツケクイカキ

○今按幸の字いさしと免らるるハ何の文もあつら  
あつらなり日本紀は嚴矛といふこととあつら  
舒明紀はあつらと嚴の字を固へてあつら  
しき体なりとあつらハ頭奴心等の字なりあつら  
一 かくあつら



百字 申すれは後の養ひに申すなり

かれともしる紀りの法とえ小

ここの養ひれは成り

んさしにわらひも信分りあそく祝ひを

致とよまかこつうちにも若業とあつ

世せれ能のふもも備成りたせは

是とて祥定成りまぬとつうに

おわりしとびされ内流わかとしめて

不位とつうとわらとせとたうとせ

神祇と語 不位とつうとわらとせとたうとせ 神祇と語 不位とつうとわらとせとたうとせ



○今梅 <sup>ヒツル</sup> 永頼 <sup>同</sup> 須純 <sup>同</sup> 既切 <sup>同</sup> は四の日本紀小引、  
あつたよ先教中よかゝるらんあつた魚一冊中よつたひび、  
ゆらんといふ歌よハ既切とわかちがけへまゝ

一  
河魂 <sup>カハミ</sup> 心 <sup>ココロ</sup> 万 <sup>マン</sup> 現人 <sup>ゲンジン</sup> 日本紀

孟梅のむつていらいはくあつたうらうらうの我昔のうら  
○今梅うらうらうあつた現心ハあつた葉のうらう  
かぐり

あつたうらうらうと我昔のうらうらうと一葉のうら  
同十二

うらうらうのうらうらうと一葉のうらうらうと一葉のうらうらうと

あつた今のおよそうつ心也現人を日本紀よりうらうら  
こよあつた現人神といわくひとあつたあつた顯見  
蒼生とすくうらうらうと一葉のうらうらうと一葉のうらうら  
うらうらうと一葉のうらうらうと一葉のうらうらうと一葉のうらうら  
考のうらうらうと一葉のうらうらうと一葉のうらうらうと一葉のうらうら  
こらうらうらうと一葉のうらうらうと一葉のうらうらうと一葉のうらうら  
今むらうらうらうと一葉のうらうらうと一葉のうらうらうと一葉のうらうら

同十二  
うらうらうと一葉のうらうらうと一葉のうらうらうと一葉のうらうら

同  
うらうらうと一葉のうらうらうと一葉のうらうらうと一葉のうらうら











盃かくといふらん

○今梅しいの且の字うらへて苟且の義苟且さう  
ろ然とそよありあほくそよありふらうくはあふら  
ありかくい義集よ如此しわまゝかきてうらへるさう  
かじくは物のかこらう一寸くわはあふなまにこれそ  
よくさゆり強いるれを物といふはうらへるさうあれそ  
かくと改てほせれなりぬらん

一 にかつる許せ

○今梅にふりくこいんらんさう  
おこるいなきしあわしよりいりる

○今梅一カ葉よ勝殊異こぬとけしりぬらん

○今梅看ミ此言うつかの云もそあり

一 文の清ゆりてしを流らん

○今梅情陰日記云

一 けしりの

○今梅情陰日記あけしりあゆらうらへるさう  
けしりうらへるさうしり

○今梅うらへるさうの便

まくらうらへるさうすうほらぬ改てまかすね年也

芳丹集

源光

ほらぬ改てまかすね年也



あまの集

山里乃人のこれけきふなきいらすく履の跡やういへる

一 けしきりみらて

河勤マシ響マシ日本紀

○今梅あ字字に日本紀と出すと先づりれ  
す他て他字と出すとふいふ事あり万葉第七  
大海のいもわきつらと波のいもわきつら浪のわき  
下今

新もしきしよすらふ水たしやじやるまじわ  
茶師寺佛足石のかつていふのふ  
みわつらふのひまわら至天に勤はら地ふしれらいはらい

一 まりしつりて

○今梅しつむははしつむり万葉

いまぬのいづくしつ家の妹はゆいなきまで今梅は  
いふのいれやてやかくはり急よるいふんは  
池のうよまのくけしつりくしよりえ

○今梅お茶弟五山上憶良の古日と名にあてを  
せらむつら子のうせつら付乃をあよ

世の人乃よまむ福ふせくこののたつと物にけきん  
りち中のうはまこおるしつむらじがふら日におい  
命たえぬまをとりあしつらひいちあわらき  
ひひらちまらふあまをいふあつしつらあか乃



みち

此弁よま白玉の我子古日といひ下まのふりてあう  
いふつしつう散ららるるはれはれを  
いふ又白氏文集哭崔兒詩云掌珠一顆兒三歳  
鬢雪千莖父六旬豈料汝先為異物常憂吾不見  
成人悲傷自斷非因劍啼眼加昏不是塵懷抱又  
空天默依前重作鄧攸身  
一 切はほしきしふ

○今按古今

一 かのうれあふぬ山はいんまふりふをほしき  
かこいしきひくて

○今按玉葉哀傷女御熙子女王かくれて後よりせ

流るる歌

朱雀院御衣

ひらひらとまきし昔のまゆえてかたきき神と力あ

一 移るあつちうりよ

○今按和名云周易説卦云其於木也為堅多心説師

多心讀余  
賀言可達

何ららとら河れはりすへて知也

一 秋乃わくれすうりけ風の音

○今按茶葉第三よ

一 けいをみの世あひさしとら物と風心あひつ  
朝やけのまうわられよ

○今按此作者あよ











一 又義の死あつしとをあら

○今梅鑑考凡冷氣死白くわつとあらしと改  
くつらり

一 君をてらりつゆりぬる

○今梅人つ孫りゆりぬるとこあらぬ死と改  
かしけりるむり

○今梅和名竹牙十四行旅具云蔣鮎切韻云標刀委及  
云標子如礼比計今梅倍所  
謂破子是破子讀和理古標子中有障之器也

一 かうくましくよハあつて

河美の子は餅は色くこ旨の夜は餅はひく色  
ぢ色の餅く中はあつてこい

一 今梅不世死はあはわつてとりよめて知能く

○今梅不世死はあはわつてとりよめて知能く  
はそねのあはきとあつてこいよはあは

○今梅抄るは物類の中に今秘傳八丁一八  
物としよううわつてこいよはあはわつて  
わまのこれよあつてこいよはあはわつて  
神のいらいつよまつて今持んと推えと  
P持つよあつてこいよはあはわつてこい  
ひのあわらしとこいよはあはわつてこい  
後梅遠云之條右段右段のわや持る人のじと  
あつてこいよはあはわつてこいよはあは



わさ梅くつゝらふふくつ徳あるは二月三日かめき  
乃く二枚ののらひくさやあつてありふく免致

友東実方朝臣

一 今梅ののらひくさやあつてありふく免致  
今梅ののらひくさやあつてありふく免致

○今梅世系と神宗父の許へて流るるを  
つてゆきしやうとみそに二系院へわくねし  
けきは今かくいふ

一 おくけ小意しき世系は  
○今梅おくけよんえてこひふまのり六枝分  
めとてせておんらたを海きおやけおはし馬かえつ

一 今梅ののらひくさやあつてありふく免致

みかりしうゝ世は神のさしあめりれはほくた徳乃  
○今梅胸白く葉よかりとれ小野とあり腰白と標  
帯をかきてさしはと点しうりな色さうけら  
くつて字はしあいらしこのしへ結句も  
ころはえれとあり

一 みそけのゆほくさ

○今梅みそけの衣桁もふ和名云爾推云  
音移字亦作櫛懸衣架也燈馬三由はよとそけよ  
和名美曾加介  
わ柳

一 今梅ののらひくさやあつてありふく免致



○今按禮<sup>レ</sup>禮とやいふしあまの衣よりせり河原  
一 玉やまのりとも

河原よりあまの衣よりせり河原  
○今按此川が昔之家が集まわり鞠のわき  
知としる六帖といわれぬことと風雅集<sup>ノ</sup>集まわれぬ  
ことと河原をいひわきし下句いみれおれぬ去の  
ことと河原をいひわきし下句いみれおれぬ去の  
撰集<sup>ノ</sup>撰集の河原の歌

ゆきふこの一の衣よりあまの衣よりせり河原  
之日二條のまことのまことあまの衣よりあまの衣より  
清きるるかられを獨りてよるこころの衣よりあまの衣より

いれれしやうとた例はあつて河原重なるり  
紙もそまのりともまきふたりとねりかをゆき  
わいてよりいれりゆきあまの衣よりあまの衣より  
一 わてり一 此年ともいふ

○今按昔之集  
わてり一 此年ともいふ  
後撰

わてり一 此年ともいふ  
わてり一 此年ともいふ



賢木

一 うね世とゆきいゝるれけんとおねい

○今接躬恒集

わづの年うはゆる守よはまはるれわつ我身うら  
後撰

ひううれとあれまふをいふとあはれゆき  
拾遺

一 うさふまかたれまの中よ新あまにいと今うたれ  
とれやふういふま歌夕月あま

夕月夜 日本紀

○今接日本紀よりいふも集よあり

一 しめ乃ほり

○今接実方家集

一 分  
たきさういふそのゆいしうん志あつとよううん  
ととあ子

し通か

○今接し女とかくい活ありあふているゆれしり  
仮名ハ於の字よを遠よあはれ女ととあといふ津女也  
津し登と通すりあまこととあといふ

一 このわめのうくりとほくといふ

○今接このわめのい夜の物とあはれを信よりふ書集  
かりこのあする人初あがりたきあてりうといふ















乃此若小多此物終よる後の奇くまじくはたたり  
ふれしゆる古来の式にあらざる物

一 一のかまきりけいふおののそと物すれは  
○今葉中よりあまじうらふらよかしくあま  
黄之集の奇よそと玉葉族よいま

一 山のへり  
○今梅和名云唐式云深麻紙廿五張穀紙十張襪  
紙二十張音方袖端也見唐韻云れ表紙とかくハ晴  
推の家く

一 ちと  
細帙篋

○今梅日本紀よ黄卷をゆんすれしあり帙ヒツの事  
ふれし経よは帙とせしむれてあじまきしん法  
の寶物をおせぬ中よ此帙篋のいさくは  
おれた代の物とせしむらつた敷経ゆき

一 一とてまのさびふつらたか  
○今梅六帖よ 素性

一 一 ゆてめらこあらさるるれ今しとわら  
月めし雲井とけくあふこと

○今梅志ふらとよき源氏春の山家歌とや  
あふらとよと下句と源のつく友よけてらんハ  
奇よけけを秋朝とせし物一 友とくや



いづれもいづれこの世はとよみしる人

— うららるゝれて

○今按 低徊 ウツクシ 神代紀下

— いづれびていづれかさるのせけし

○今按 六帖

あふとぬわに花のふな川をのたひるはれん人を知る  
仔細物終るもたむるさるのけさあわさるきつ草花  
さるる也

— 孟さいあれもこの詞あり

○今按 さいあれの畧ははの字わしむし

花散里

— 一人志をぬけしつ

○今按 古今

春風を花のあちとよけてやけらつゝやうりあふん

— うやうやの家

○今按 細カ許 遊仙窟

— おほりしつや

○今按 後拾遺 新宮女御

夏はとおやあふさゆくその中よひさしんしんはるるもあ

同

おほりしつや



一 おらうりえとてのこまぬ

花とらうりハ万葉二百十反ナチカヘリあり

○今梅翁集ははくく百十反といふ河合イハハヤヒ五百重山  
ハ百日行濱ヤハカをいふ時百のかるハ保之遠はわく五  
百入といひて廬九借字とせり

拾遺集

みつ詠

郭とらうり之をけけらるるは髪のはなれをら  
母哥躬恒集を載りをら之の河津奇イ  
くしやなり百十遍の美すハ保加散里とありと  
後の人をら之と改らるるハ躬恒も音便とせり  
得りて初らうりといふしハ先歌

一 うゑーかまひのこやて

細花らうり一庭のあすこをらわひてうーかまひハコ

○今梅は川分河よりゆり糸束及見芳丹也

世に一庭の本花も志ありわひて天を月月のけとれ

よの白はとれとては

いふーこやて

今梅のこがしんをらまじいふとてあつたは

○今梅は色六帖并五帖のあすり葉物家集  
云むこのよまけりけきハ昔のあすり一たまふ  
してハ雨よむわらせてあすりては中ふや  
此弁わりのあすりハあつたはとてあつたは











これとて東宮の女房人小入道の君也

わびかきりたが守る母の中にもこれよりよき人なすん  
せりる小所家集と小入君家集と入梅とととと  
奇おつけまこれと小入君の家集と小所家集といふふりる  
趣

一 昔よりくわつわつ人といふんてぬくくらぬ——はなはた  
まのちか

○今梅貫之家集

一 ちかちかといふはたもめおはたかひつとちかちか  
うたてとくらうけと

○今梅深春をくらたてとくらおめいとれい

詞のこゝろ

一 こゝろ

○今梅兼輔家集

一 けりのおこのいしをれてておのしうた 丁々れ  
これ井もといふんやういよと波の花のこてとらめ  
まて人よちかへ——わり  
いぬのしづくもたへ

○今梅万葉集

いしをるりちかめいふら——はなはたかひつとちかちか  
古今

我うはなはたかひつとちかちか



一 ちたひーまゐる

○今梅抄よと哉ありとらぬかゝり疑ひてはら  
先ねらよと感ありき家この弁いんるいひては  
後拾遺集に於て

一 いとじのまいさく

○今梅抄詞末摘ゆんの巻ありとありき  
拾遺集雜意 家持

久々のぬれあり日なつて都りの山色よとまじりぬれあり  
こまの葉芽四よありて梅<sup>イフセカリケリ</sup>有來とまじりぬれあり  
改て入るれるハ沈梅付のらうと華一いさきけは  
らうとぬれあり

一 ちたひーまゐる

○今梅河海よ

且れもつたなりやふま本根なりとし  
此方六帖りぬれかきよいなり  
あやうりこゝ紙やくあて

○今梅河海よ

此よとの命とあひま乃中のほあのみとや  
い新流布のちよやくとまじりぬれあり  
後拾遺集意四

やくとまじりぬれあり

新千載雜中

業式部



しんしの海をいひわたらうとてふとあはれにわかれり

新拾遺志二

和泉式部

うみの海をいひわたらうとてふとあはれにわかれり

夫木二十又

經佐

神の浦にたるとやくと指れて舟

ふれくふを焼し彼と成美うけ申は相撲と經佐とい

は物終より後有りこ卯も皆敷例に申ふまよひわら

うにいとあまこにつじ

○今接胸向あふらつじいこい色一その色にわま

人ははくじし言海にわまこの河海へまえり故に

こひのむと火あふしこれにとよみつじあまをいたさ

らわしれす海へまこえれとそれかこの河にま

しとまそり一火火くわんしあま

あまやあまを移すいなのを

○今接 餘 シヤカ 日本紀 深沉 同

はくまきこのみこ

○今接

一 伴誓しゆやしわいのこふ

○今接 後撰志二 長谷雄

あはれのふわたりするあはれあはれくわいあはれを思ひ

新古今雜下

和泉式部







今梅つゝの唐の族裔のり成りたるはいふにやういふは  
向とせしり

我者よきわの言明とよえいこらきつゝおとさる  
おれを川合てなりし屋

おのやけのかり

河孝辭 日本紀

○今梅日本紀よんえさるりれ

お身ふあきしれすぐせおねせとあふいそな  
うらうていつまれんさほとねりいへ

○今梅いそはの下をく白紙切る一ちきい  
てふとて後ふあり

一月乃々るらんしとるい

○今梅年のあしんしとやうにねのねんしと  
ふりしと成りあり

くいしとてゆいど

細苦痛

○今梅屋一痛うて

いしかりとくさる名成りあり

今梅兼盛集

頃いふ浦とありしとわしとあしとあしとあしと  
さうさうとあしとあしとあしとあしと

○今梅和名竹牙十六兼名苑云困一云廩  
伊奈 四聲  
久良











万葉第十一

妹のゆきすねのひらきの海をゆいねをさかすか  
これとちかよはむらふの海もよらんわはくれせん中  
わりのみすいあふりかむやまのつて信馬業の舞を  
是より心来りる記

山谷詩云歸扇漳小雨ひらくよあまら

一 波といふあふりうららて

○今按日本紀は嚴の字重乃字さむいといふ  
是り事と嚴重よと致と常よとといふりし  
あよかり願志念怒等の字をといふよと  
しよと通ふは怒潮怒浪がといふといふ

きいあら

一 海のみりていぬとほとらうとてい

○今按万葉集第七

あらし舟ほもよれうららてよまをたうとたて  
あはれ

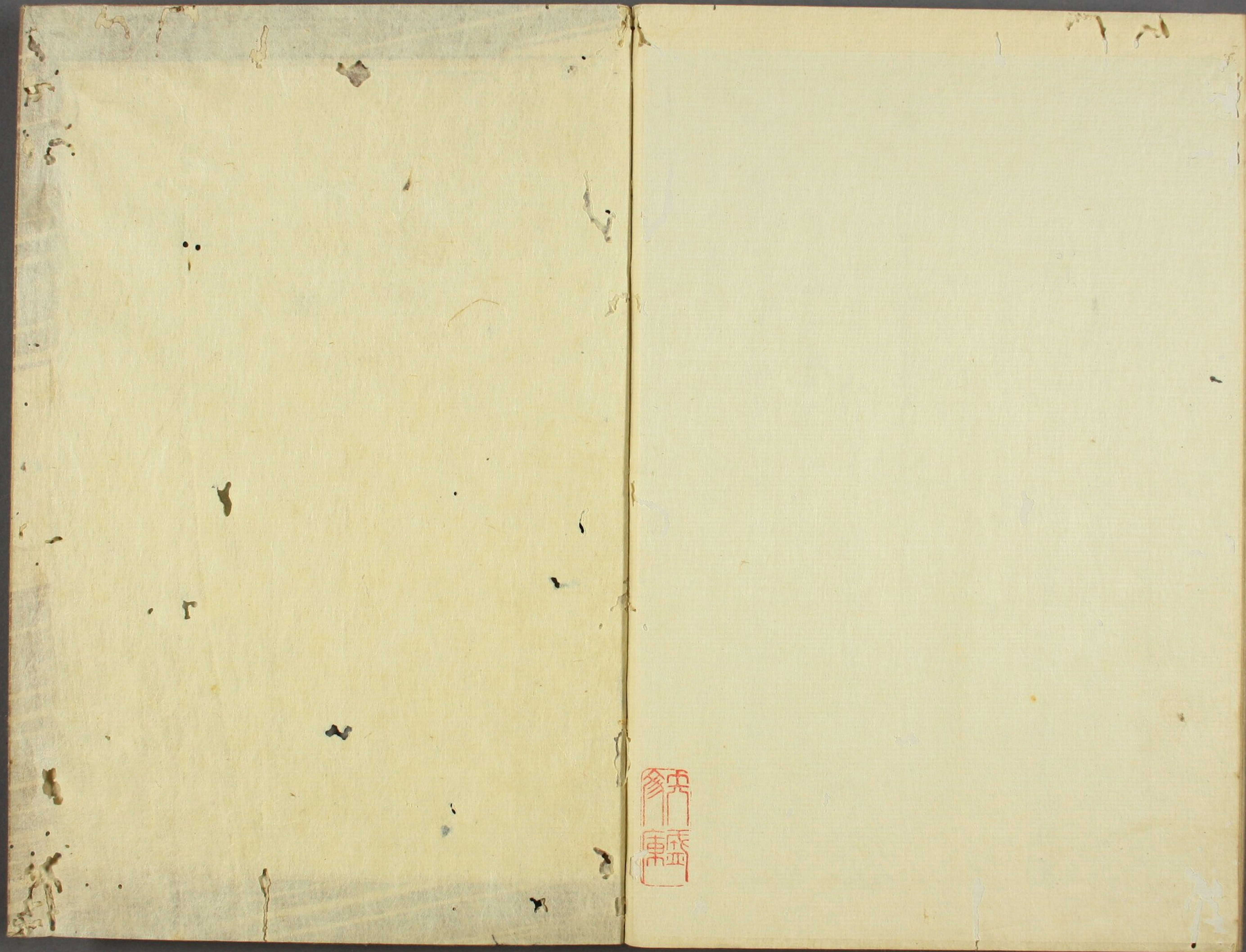
一 沖より望み

○今按咫咫日本紀

一 かくて世を法をわらやしらほそく思ひまどあな

○今按日本紀第九神功皇后紀云新羅乃建國  
以來未嘗聞海水陵國若天運盡國為海乎





吳興  
藏印



